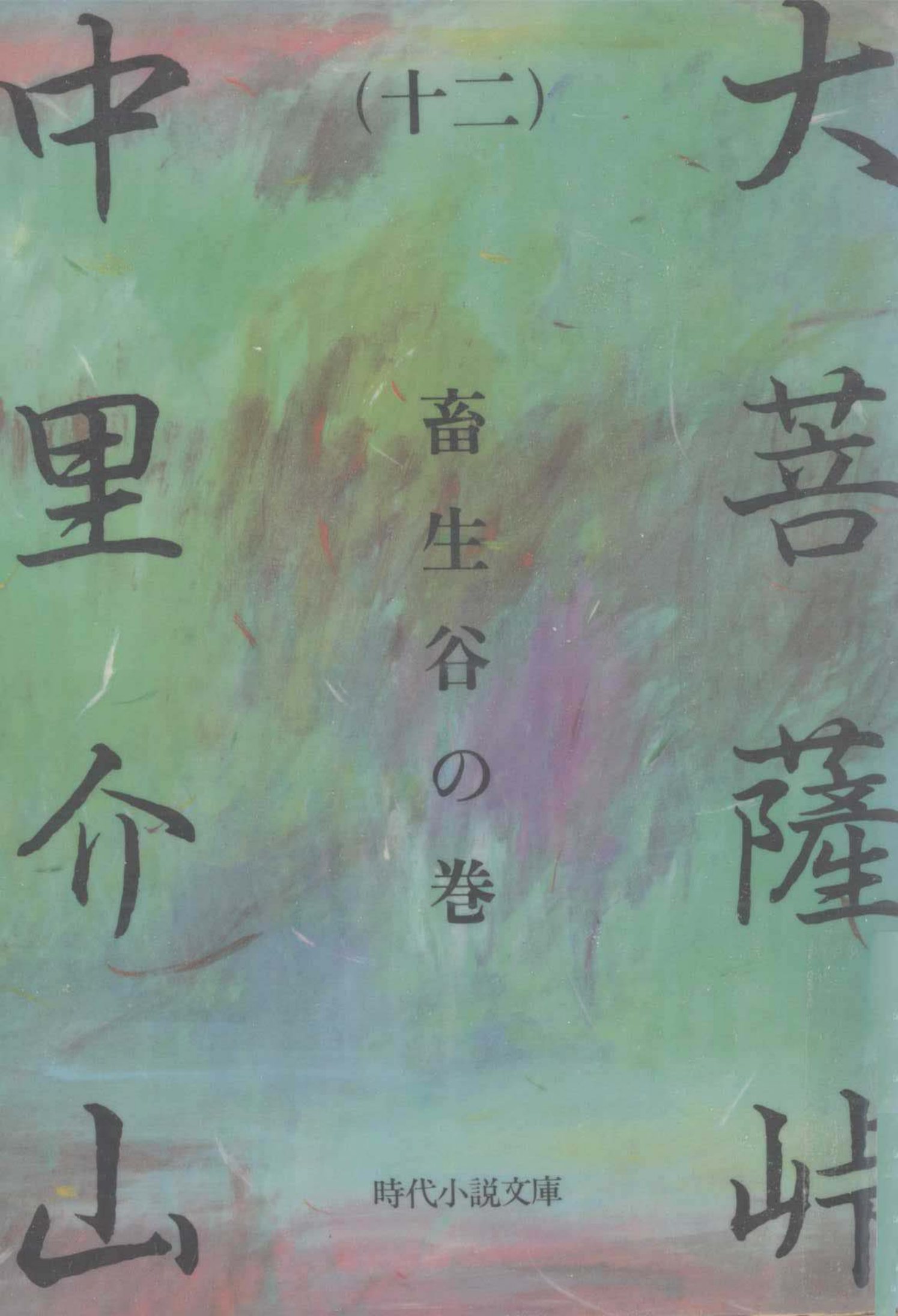




大菩薩峠
中里介山

(十二)

畜生谷の巻

時代小説文庫

時代小説文庫 12

大菩薩峠 (三) 畜生谷の巻 全二十冊

昭和五十七年一月二十日 初版発行

著者 中里介山

発行者 原 秀行

発行所 株式会社富士見書房

東京都千代田区富士見一―十二―十四

電話東京二六一―五三七五(代表)

〒一〇二 振替東京⑦八六〇四四

印刷所 旭印刷 製本所 大谷製本

装幀者 熊谷博人

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-600112-7440(0)

時代小説文庫

12



富士見書房

菩薩峠

(十二)

畜生谷の巻

中里介山

目次

年魚^{あいち}市の巻（つづき）

七

畜生谷の巻

二八七

『大菩薩峠』のイメージ

永井泰宇
四一九

大菩薩峠

(十二)

畜生谷の巻

年魚市あいちの巻（つづき）

二十七

万松寺の境内を一わたり歩いて、白雪はくせつ稲荷の前に来て稚児桜の下に、どっかと坐りこんだ米友は、しきりに眠りを催してきました。

ついに、うつらうつらと、桜の根を枕にして、うたた寝の夢に入ったのは、米友としては、稀有けの例です。いつもゆるみのない彼、責任感の殊の外強い彼。ましてこの度は、尊敬すべき道庵先生の為に、忠実なる従者であり、勇敢なる用心棒である上に、道中は、どうかすると、素行の上において、監督者としての役目をも、負わせられている米友。いつも張りきった心と、油断の無い目をみはっていたのが、今は珍しくこの稚児桜の下で眠りを催し、つい、うとうととして夢に入ってしまった。

このくらの余裕はあってもよろしいし、無ければ米友としても、やりきれない。それに今日は老巧にして如才たふさのないお数寄屋坊主の玉置たまき氏が、道庵の身の廻りには、付ききりで周到な斡旋あつせんを試みているし、ところは、この寺の奥殿の中に封じこめて、その下足は、確かに自分が保管し

て来ている。どう間違つても碓氷峠の下で、裸松の為に、生死の目に逢わせられたり、木曾川沿岸で、土左衛門の影武者におびやかされたりするような脱線のないことは保証する。まかりまちがったところで、それは平を踏み外し、仄を踏み落して、住職や、有志家連をして、手に汗を握らしむる程度のものに相違ないから、その点の安心が、米友をして仮睡の夢に導いたと見らるべきです。

いく、しばらく、昏昏たる夢路を歩んでいるが、道庵お立ちの声は容易に、その夢を驚かすことが無い。

そこで、つい、うたた寝のかりねの夢が、本ものになり、ほとんど熟睡の境に落ちてゆきました。

だが、それも深く心配するものはない、従来、きわめて夢そのものを見ることの少なかった米友も、近來はしばしば夢を見ることに慣らされているけれども、かつて不動明王の夢を見て、江戸の四方をグルグル廻らせられたほどに、夢を持て余すことはありません。

それ以来、夢を見るには見るけれど、夢の後に来るものは驚愕にあらずして、多少の懊惱と懷疑とです。甚だ稀には歓喜であることもあります。最も困惑するのは、夢と現実との世界が、はっきりしないその当座だけのものでありましょう。

彼は、どこぞで一たび靈魂不滅の説を吹きこまれてから、それが全く頭脳の中に先入していて、生きている人と、死んだ人との区別が、どうもハッキリしない。有るようで、無いようで、今まで生きていた人が、死んで消え失せたとはどうしても思えないし、そうかといって、眼前、自分

の前で死なせて、お葬とむらいまで立ち合った人が、もう一ぺん、生きて動いて来るとは、どうしても考えられないこともある。

尊敬すべき道庵先生に、その靈魂不滅説の根拠にまで突っ込んで質問を試してみたこともあるが、先生の答が、要領を得るような、得ないようなことで、おひゃらかされている。

とにかく、この男としては、どうしても死んだものが、もう一ぺん、形を取って現われてくるようにしか思われてならない。死の悲しみは味わわせられたが、それは、別離の悲しみの少し深い程度のもので、いつか、また会われるという感じが取り去れないのが、今はもう信念というほどのものにまでなっている。されば、江戸で失った大切な馴染のお君という女に、この度の道中のいづれかで再度めぐり逢えるように思われて、信ぜられて、此処まで来ている。

多分、このときの熟睡の中にも、旅中しばしば繰り返されたその夢に、つい先、見せられた故郷の山河が織り込まれて、相変らず生と、死と、現実と、幻との境に、引きずり廻されているに相違ない。

こうして熟睡に落ちている時——隠里かくれきりの方から賑にぎやかな一隊の女連れが繰り出して来て、稚児桜を取りまいて、

「稚児桜よ」

「大きいわね」

「大きな稚児さんね」

「本当に大きいわ、花が咲いたらさぞ見事でしょうね」

「花の時分には、ここでお稚児踊りがあるのよ」

「踊りましょうか」

「踊りましょうか」

「手をつないで、この桜のまわりで、皆さんで踊りましょう」

「いいこと、ね、踊りましょう」

「皆さん、よくって」

「ええ、いいわ」

「じゃ、踊りましょうよ」

「踊りましょうよ」

女連れは、おたがいの手をとり合って、お稚児桜の中に輪を作ってしまった。自然、右の桜の根を枕にして熟睡に落ちていた米友ぐるみ、輪の中に入れてしまったものです。

「さあ、踊りましょう」

「よい、よい、よいとな」

「よいとさ」

「あら、よいきたしよ」

「及びなけれど——」

「ほら、よい」

「及びなけれど——」

「ねえ、ねえ」

「万松寺ばんしょうじさんの」

「はい」

「万松寺さんの——」

「はい」

「お稚児わらわ桜——」

「お稚児わらわ桜——」

「一枝手折たおって——」

「一枝手折たおって——」

「欲ほしゅうござる——」

「欲ほしゅうござる——」

初めは手をつなぎ合つて、輪をつくり、三べんほど廻つてから、音頭で、はっと手を放し、『及び無けれど』で、左の手で、ちよつと長い袂たもとをおさえて、右の手を上げて、桜の枝を指し、『万松寺さんの』で、クルリと廻つて、お寺の廂ひましを見込む形になり、『お稚児桜』でまた長い袖をたくし上げて、西の堂を前に、肱ひじの角度を左右に開いた形もよい。

『一枝手折たおって欲ほしゅうござる』で、手をからげて水車のような形も艶つやっぽくてよい。

この時ならぬ花見の催しに、あたり近所が急に春めいてきて、病葉わづらばの落ちかかる晩秋の桜の枝に花が咲いたようです。折柄、参詣の人の足もとどまり、近所あたりの人も群たかつて来る。

踊り手も、それで一層、張合いになって踊りもはずみました。

そこで、自然、宇治山田の米友も、ひとり長く甘睡を貪ることを許されなくなりました。

踊りに夢を破られた米友が、むっくりと起き上り、睡眠を見張ると、この体たらくで、不覚にも眠りこけた自分というもののおぞましさを悔ゆるとともに、いつの間にか、あたりの光景の花やかな変り方に驚きました。

自分の寝こんだときは、四方に人も無く、日当りのいい小春日和で、おのずから人を眠りにいざなうような、のんびりした桜の木蔭でしたけれども、眼がさめてみれば百花爛漫の園となつてしまつたような有様ですから、しばらく米友は、夢の中の夢ではないかとさえいぶかりました。

仰天して見ると、あたりこそ花を振りまいたような陽気ですけれど、仰いで見るところの稚児桜は、寝込んだ以前に見たのと、少しも変わりません。

枝が老女の髪のようにおどろに垂れて、病葉が欠歯のように疎らについているを見ると、彼は急に狼狽をはじめました。

「いけねえ、つい知らずに一寝入りやらかしちゃった」

狼狽してみたが、前も後ろも目まぐるしいばかりの踊り手で、その後ろはまた見物の人ばかりで垣根を造られている。

そこで、米友は、例の杖槍と、荷物に手を触れてみたが、これには異状がありません。

本来、こうしたあわてぶりは、米友自身だけで単独に見せられると、かなり人目をひくのですが、この場合誰しも、一人、このグロテスクに注目する者の無かつたのは、集まっているほどの

者が皆、踊りに目を取られていたからです。

けれど、たまに存在としての米友の狼狽ぶりに注意を向けたものはあっても、多分、これはこの踊りの女連れの弁当担ぎか、下足番の小冠者に過ぎまいと見ただけのものです。

そこで、米友は、誰の何らの怪しみにも出逢わさずして、手早く荷物を取って肩にかけ、杖槍を拾い取って、飛び立ったが、さて、行かんとする周囲は、踊り連の妙なる手ぶりで、蟻ありも通わせぬようになっていいるから、さすがの米友も、その一方を突破するに当惑しました。

手を放して、めぐっていた踊りの連中が、この時は、また手をつなぎ合って、ぐるぐるめぐりをはじめたから、相手がこの連中であるだけに、米友としても鉄砲玉のように、その一角を突き破って通ることに、いささか躊躇ちゆうちよを感じました。しかしながら、その一角を突き破らぬ限りには決して、この囲みを解いて、自分の身を解放することが出来ないと考え、そこで思いきって、突破にかかろうとしたが、さてまたそこで、いずれあやめと引きぞわずらう、というわけでもあるまいが何処ぞに突破口を求むれば必ずその一角が犠牲に供される。米友としては、この踊りの連中のいずれに対しても、特別に信用と晶頂ひいぎとを感じているわけではない。実際、こういうふうに、まんべんなく緊張して、いずれもいい気持になって踊っているときには、特にここを破ろうとの破綻はたんというものが、ちょっと見出し難いものと見えます。

そこで米友が、引きぞわずらうという気持で、躊躇ちゆうちよをしている間に、

「あっ！」

といって舌を捲いて躍り上がりました。そのクリクリした眼を、踊り子の連鎖の一方、つまり

或る一人だけに注いだ米友が、

「あっ！」

と、二たび、三たび、地団太を踏んだのは、そこに破綻を見出だしたのではなく、そこに特別に何か興味の中心を見出だしたもので無ければなりません。

「あっ！」

二度、三度、叫んで、地団太踏んだ米友が、その時こそ、本当に鉄砲玉のようになって、今、自分が見つけ出した興味の中心、——つまり、踊り子の中の丁度、巽^{たつみ}の方角にいた一人の若い娘の方に、無二無三に飛びかかってしまいました。

この時になって、群衆の興味が踊りの方面だけに取られてはおりませんでした。

むっくり起き上った時は、さほどではありませんでした。荷物をかつぎ上げた時も、杖槍を拾った時も、まだ見物に向かって何らの注意をも呼ぶに足りませんでしたけれども、いよいよ立つて一方を突破しようとして、小さな仁王立ちで、あたりを一睨^{いちげい}した時分から、第三者としての見物の注意がようやくこの存在に向かって来ました。

一角に何か事ありと見て、異様な叫びを立てながら、二度、三度、躍り上って地団太を踏んだ時分には、それに当面していた者の注意を免れることは全く出来ませんでした。

それと同時に、どっと、失笑の聲が湧き出したのは是非ありません。

この男の、ムキになった狼狽ぶりは、知っている者は気にしないが、はじめて見る人にとっては、絶大なる驚異と見られることも多いのです。子供たちは稀にそれを恐怖を以て見ることもあ

るけれど、御当人が真剣であり、御当人が困惑すればするほど、周囲の人には、滑稽であり、無邪気であって、最も好意ある失笑を以て報われないという例はないのです。

今もその例に洩れず、真面目に狼狽しはじめたグロテスクの存在が、ハッキリと浮き出した為に見物以外の見物が、見るほどの人をあっけにと取らせました。その時早く、桜の樹からは巽の方面に踊っていた一人の娘のところへ行つて、委細かまわず飛びついてしまつて、

「お前……お前」

米友は烈しく吃つて、

「お前は、よっちゃんじゃねえか」

と叫びながら、無理にその女の子をゆすぶつたものです。

そこで、踊りの情景が粉碎される。

袂を取られて、この怪物に喰いつかれた娘は面の色を変えて驚いたが、小突き返されていなが

らそのグロテスクの面影をチラリと見て、

「おや、お前さんは米友さんじゃないの」

こういつて、色を立て直したものですから、

「おお、お前、本当によっちゃんだな、おいらあ、米友だよ」

彼は、その昂奮した顔面を、すりつけるように、自分が、よっちゃんと呼びかけた娘に近よせると、たじたと後ろに下がりながら、

「怖い、米友さんは米友さんに違いないと思うけれど、米友さんのはずがない、本当の米友さ